

4 シスター・ローザ

I

吊いの鐘が鳴る
死を告げる鐘の音が
山に木霊する
今 黒衣の修道士は
頭巾を目深に被り
部屋に独り座っている

5

II

死の冷たい手が
修道士の震える息を凍らせる
耳には恐ろしい歌が聞こえる
それは 天翔る亡霊どもが
一斉に通る過ぎる時
一日の終わりにあわせてうたう歌
容赦ない運命の女神が
ローザの肉を土くれへと腐朽る時を
亡霊どもはうたう

10
15

III

その時は過ぎた
それは 修道士の脳ずいの髓から永遠に
平安が去った瞬間だった
目からは熱い涙が静かに溢れ出た
抑えようにも抑えられなかった

20

IV

美しい金の十字架を床に投げつけた
吊いの鐘が耳に突き刺さる
「ローザには これからずっと
喜びがある
私にあるのは 破滅と戦慄と恐怖だけ」

25

V

弔いの鐘が鳴った時
目をぐるりと回し
恐ろしいほどの苦痛に荒れ狂い
地団駄を踏んだ
鐘の音が止むと
涙がまた溢れ出る

30

VI

凍てつく絶望の痛みで
激しい不安の鼓動は凝まり
ただ口もきけずに苦悶の中 座っていた
ついに 雲ひとつない夜空に星が瞬き
青白い月明かりが丘を照らした

35

VII

修道士は部屋で 跪いた
地獄の恐怖も
苦悩の痛みに比すれば喜び
修道士は神に祈った
永遠なる呪いを解きたまえ

40

VIII

跪き 一心に祈りを捧げた
ついに修道院の鐘が真夜中 1 時を打った
燃えたぎる血が その鐘で凍てついた
虚ろな声が 恐ろしい声が 耳もとに囁く
「お前の懺悔のときは終わった」

45

IX

夜の闇が濃くなり
輝く月の光が
山の頂で翳っていった
暗い山から声が
冷たく低い声がした
「修道士よ いつでも死ぬがいい」

50

X

修道士は立ちあがった
心臓は激しく鼓動し

四肢は恐怖で麻痺した 55
青ざめた額は
墓地の露で濡れ
死者と眠ることに震えた

XI

真夜中の大嵐が
大柄な修道士の周りを荒れ狂う中 60
礼拝堂の裏手の暗がりを探し求めた
踏まれた草が吹きすさぶ風にあわせて
ひゅうひゅうと揺れる中
修道士は真新しい墓を探し求めた

XII

暗く大きな亡霊どもが 65
修道士の周りを飛び
その叫び声は風の音と混じりあうようだった
真っ黒い壁に
ぼんやりと いくつもの影が浮かんだ
修道士は恐怖に慄きながら進んだ 70

XIII

嵐の悪鬼どもが
真新しい墓の上で暴れまわる
恐ろしい亡霊どもが蠢^{うごめ}いている
修道士は神に救いを求め
恐怖のあまり 顔^{くずお}れた 75

XIV

絶望が腕に力を与え
呪いを追い散らそうと
ローザの棺を打ち破った
すると激しい嵐は
なお一層 凄まじく吹き荒れ 80
雷が轟き渡った

XV

悪鬼の群は喜びで声をたて
腐^くちゆく亡霊どもと一緒に笑った

悪鬼どもが宙に舞うと 不気味な翼が
高く恐ろしい音をたてた 85

XVI

死んだ修道女の墓から骸骨が起き上がった
地獄の冷たい露を滴らせ
腐ちた眼球に青白い炎が宿り
墓に佇む黒衣の修道士を
勝ち誇ったように照らした 90

XVII

女の腐ちた手が修道士の震える頭をつかんだ
恐怖が力を与えた
「私はもう生きられぬ
死が私の悲痛な苦しみを終わらせるのだ
地獄が大きく口を開ける そこであなたと会おう」 95

XVIII

骸骨の肺が音をたてた
恐ろしく 寂しく 凄まじい音
長く長く地面が揺れた
容赦なくその音が漂うと
低い呻き声が地獄から応えた 100

(伊藤真紀訳)